

「農」からの「知的生産」～思考と創造のアーカイブ



博士課程メディア・アート領域 大西 雅子

目 次

「ここ」で暮らす～着想の背景……………	①～④
第1章「ここ」で見つけたこと～研究の目的……………	1
1-1 「農」のある暮らしからにじみ出る鍵……………	1
1-2 「農」の空間に存在する「鍵」を活用すること……………	2
第2章「ここ」は「どこ」～研究の定点観測……………	3
2-1 研究の場としての「ここ」……………	3
2-2 調査対象は「ここ」の全て……………	4
第3章「ここ」から始まる～研究の展開……………	7
3-1 「鍵」を記録する～写真調査シート～カード……………	7
3-2 「鍵」から発する展開①……………	12
3-3 「鍵」から発する展開②……………	14
3-4 「鍵」から発する展開③……………	16
3-5 「鍵」から発する展開④……………	19
3-6 「鍵」から発する展開⑤……………	20
第4章「ここ」から「どこか」へ～展開の再構築……………	22
4-1 「ここ」と「そこ」……………	22
4-2 「ここ」から「どこか」へ……………	28
最後に……………	30
参考文献……………	31

「ここ」で暮らす～着想の背景

思い起こせば45歳(2000年)のころ、何もかも気にせず、全く開き直ったところで「作品」を考えてみようと思った時から、この研究は始まっていたように思います。

芸大生として学生生活を謳歌していた頃には自分の思うがまま、気弱な自分自身を表現するものとして「作る」行為を模索していました。それから、生活のために仕事をし、結婚、田舎暮らし、食べる為の農業、子育てと必死で生きているだけで、美術とか、自分自身とか、表現とかと無縁な日常を暮し、あっという間に20年ほどが過ぎ去りました。

それは京都の片田舎・京丹波町に住んでちょうど15年ほど経った頃です。

仕事として高校の美術教師を始めました。高校生に創作する時の喜びを伝えようとする時、まず「自分を喜ばすこと」から創作をなさいと言いました。その次に自分以外の誰かをも喜ばすことができたなら、よりあなたの表現の存在意義が高まるよねと言いました。何処かの誰かを喜ばす事を想像しながら創作することを前提として、授業をすすめていました。

私は学生の頃、本当に創造をしていたのだろうか？
誰かのために創作をしていたのだろうか？
自分を喜ばすことで満足していたのではないだろうか？

そんな思いがぼんやりと自分の中に生まれたのは、当然と言えば当然のことにように思いました。教える側になってもう一度、創作の真意について考えたのです。

それからです。

45歳の自分が創作するならば、どういったものを作るのであろう。高校生に美術を教えるならば、自分も美術を実践しなければならないだろう。高校生に個性を追求させるのであれば、自分の個性も明確にしないわけは行かないだろう。45歳の自分が創作するものはどんなものなのだろうと、自分自身に久しぶりに興味も湧き始めました。



自分が成し遂げてきたことを創造のベースとし、何処かの誰かを喜ばす事を前提として創作することを始めたのです。

自分が生きてきたことを全肯定することから創作は始まりました。美術とは？とか作品として？とかは全く無視して何処かの誰かのために、創作することを始めました。自由に解放された私にとって、きれいに管理された田園風景は農業作物の生産工場ではなく、農民一人ひとりの芸術作品のように見えました。道路の傍らで花をつける野草たちは、目的に対してストイックに突き進む思想家のように見えました。変わらないことを田舎らしさというのなら、田舎らしさは伝統工芸品じゃないか。作りすぎた白菜を玄関にそっと置いてくれる近所のお爺さんの行為は、お金を媒介としない新しい流通のシステムなのではないか。年に4回行う草刈りは、立派な環境造形物だ。味噌を作るために大豆を育てる。作る行為の原点から終着点までを自分の手と目で見届けることは美術界ですら忘れてしまった構築の手法ではないだろうか。と、目に見えている世界が変化し始めたのです。

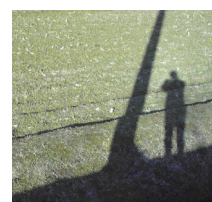


その頃、各地方でアートイベントが開催されていることに興味を持ちました。美術館や画廊ではなく古民家や田畑などの自然の中でアートイベントを開催することに、もはや田舎者で提供される側の意識に立っていた私は、無謀で地元の人々の作り上げて生きた風景を汚す行為と感じ嫌悪感を感じていたのです。しかし、そのアートイベントもあっという間に10年の月日がたっていました。



10年続くイベントはもはや提供されたイベントではなく地元のイベントだと気付きます。自身の経験からよそ者は10年経つと地元を受け入れられた感じがしていたからです。

10年継続することができたイベントには何かがあると感じ企画案を書き公募に応募することにしました。私の持つ経験は前述の通り美術家として美術界をリードするものではありませんが、自然の中での表現や地元の人に喜んでもらえる表現形式については経験値が違う。田舎暮らしの共通言語を持っていると感じている私は負ける気がしませんでした。夫との連名で、最初に応募したのがこの企画です。

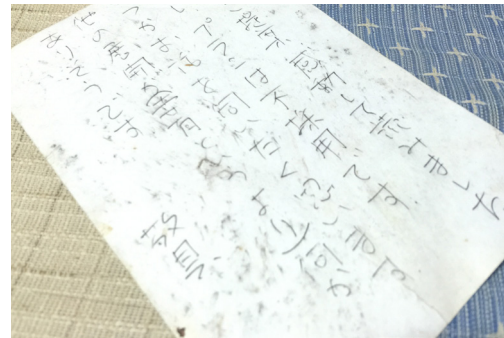


「ここ」から「そこ」をつなぐ米づくり計画

越後妻有アートトリエンナーレ 2009

概要：その地域に住む人を笑顔にしたい。

10年を経たイベントはきっと10年を経たからこそある苦勞も想定できる。田舎暮らしは生活が厳しいものだ。ほとんどが兼業農家で休日返上で先祖から託された田畑を守っている。専業農家も大変だ。効率よく生産していかないと農機具のローン返済が滞る。お気楽なよそ者が起こしたイベントに参加してる場合じゃない。田舎は仕事を選べるほど仕事は無いんだ。地元でイベントを快く受け入れてくれている献身的で保守的な住民が主人公の企画。



それは、地元民が発信者になれないか？という企画でした。地元の方が受け入れたイベントは受け入れること自体が地元民の作品と思ってもよいのじゃないかという視点に立ったものです。その頃、日本のあちらこちらでこの種のアートイベントが立ち上がっていました。何処のイベントにも地元民がいます。同じように受け入れていくことを表現し、継続と保全を代々受け継いで来ている人達を繋げて「小さな埃」から「大きな誇り」へと導く企画です。

この企画は自信はありましたが、残念ながら公募に落ちることとなります。しかし、このイベントの制作プロデューサーから賛意のハガキが来ました。

気を良くして、またも企画を応募しました。



「ゲロンパ合唱団」

概要：毎年、緑り広げられる農業。機械化や小力化が進む農業の中でも、最後まで人の手を使って成し遂げなければならない「草刈り」に焦点を当てて、つらい草刈りを少しでも楽しいものと感じさせるものを提案。見た目の形状を楽しく田畑にあっても違和感のないものにする。草刈り後の草は邪魔なもの。燃やすと法律違反になるので燃やすこともできない。なので、コンポストに入れて堆肥にして肥料として使ってしまう！



紆余曲折はありましたが見事企画が通り作品化することができました。

この企画は今思うと自分の経験を前面に出したうえで
の企画でした。農業は大変、とくに草刈りは大変という
ことを経験していなければ、発想できない企画です。その
時、自分は今、発想の起源が造形や思想ではなくなっ
ていることに気がつきました。それからは事あるごとに
全国のイベントに応募し、落ちたり通ったりを繰り返し
ながら自分自身の経験を踏まえた創作を楽しみました。



公募展の出す様々な課題を田舎暮らしから得た多くの
観点から発想し、作品を構築していくことに慣れ出した
ころにまた、新たな思いが頭をよぎったのです。

「農業は土づくり」からの教えに従い、創作も土づく
りが大切ではないだろうか。花や実をつくるより土を肥
やすことにも重きをおいてもよいのではないだろうか。
この次々と思い浮かぶ田舎者の思いつきから形のある
「作品」を考えるのではなく、この思いつきを記録とし
てまとめる事の方がよりわたしの個性を表すものであり
「作品」なのではないだろうかと考えました。

農業における土づくりは、バランスの良い土をめざし
ます。物理的にも科学的にも生物的にもバランスがとれ
ている状態を良い土と呼びます。しかし、農業の歴史は
生産効率を高めるために化学肥料や農薬を開発して土づ
くりよりも生産量を重視した農業を発展させてきました
。それでは、美術における土壌はどのような状態を理
想とすべきなのでしょう。農業のように生産効率重視の
機械化や農薬の大量使用をしているのではないでしょ
うか。

バランスのとれた良い土壌に種をまくことで創造は発
芽し、花を咲かせ実をつける。そしてその実は種となり
次の花を咲かせる。葉や花や果実は堆肥となりまた土壌
を肥沃させる。創造の土壌には先端技術や最新情報シス
テムだけでなく、今、忘れ去られようとしてる「農」か
らのヒントも土壌の中に鋤きこむ事が必要ではないかと
思い、この研究を思い立った訳です。



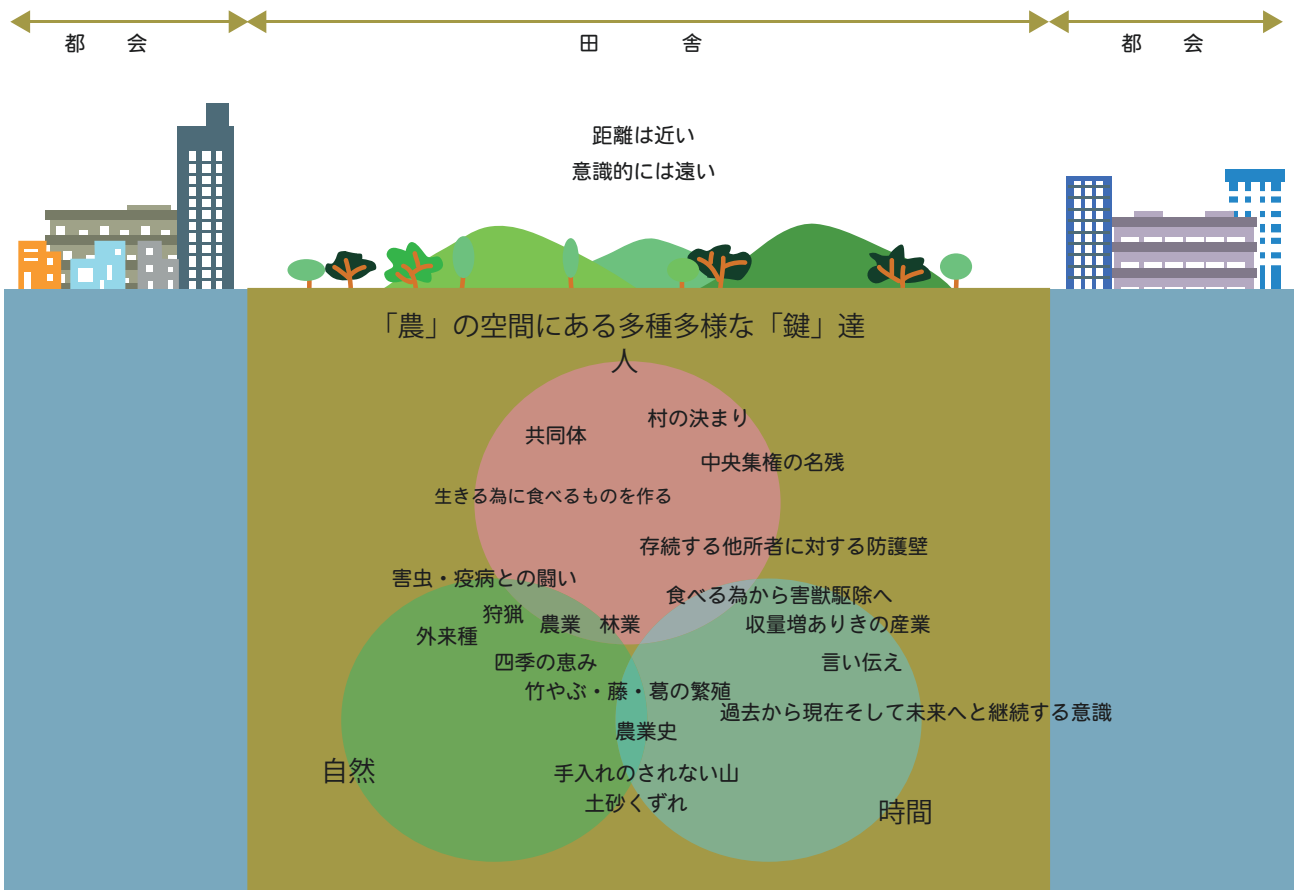
第1章「ここ」で見つけたこと～研究の目的

1-1 「農」のある暮らしからにじみ出る鍵

都市から京都の片田舎に移り住んで25年ほど、都市での生活では知識として、書籍や映像などの記録媒体からでしか見聞きできなかった事柄を自身の経験として体感する事ができました。その経験は人と自然・人と人・人と時間などの人に関わる関係性の歴史を追体験するものでした。

この体験は「つくる」行為をするものにとって、とても印象的で私の創造的意識を触発させるものでした。この研究では、この体験から得られた知識を「農」の空間から得られた「鍵」と呼びます。

図 1-1 都会と田舎の概念図



1-2 「農」の空間に存在する「鍵」を活用すること

「農」の空間から得られる「鍵」は、有効であるもの、何の役にも立たないもの、創造とはかけ離れているものなど、多種多様です。その多種多様な「鍵」を誰にでも活用しやすい形式で集約していきます。一見、役に立たないものでも使う人によっては有効活用が出来るかもしれませんが、今ではなく時がたつと有効になるかもしれないからです。

経験は人それぞれで、すべての人が同じ経験をするとはできません。しかし、経験を情報化して共有することは出来ます。私は「農」の空間から多くの「鍵」を見つけました。この多くの鍵を一人で抱え込み、毎日眺める事も楽しい余生かもしれません。しかし、その鍵を使って別の人々が別の鍵穴に挿してみる事も創造を託すと言う意味で有益な事であると考えます。

創造のこぼれ種から根性創造がアスファルトの隙間から芽生えるかも知れない。

創造のひつつき虫が狸の背中に取りつき、遠くの街まで運ばれるかも知れない。

創造の種は間引きされ、大株を作るかも知れない。

創造は常に、多くのイメージをふるいにかけ取捨選択をくり返す思考の迷路から生まれます。この研究はその思考の迷路の出口を示す文字通りの「鍵」になるかも知れない可能性を秘めています。この「鍵」を使って道を見つけていくことで出口の先に変化が起こるかも知れません。また、「農」という消費と生産の縮図の示す空間で得られた「鍵」はアートのみならず社会全体や流通システムまでをも巻き込んだ新しい提案に進化するかも知れないのです。

図 1-2 創造の迷路概念図

創造の迷路



第2章「ここ」は「どこ」～研究の定点観測

2-1 研究の場としての「ここ」

日本の何処にでもある「農村」の風景が「農」のある空間です。今回の研究は個人の経験に基づいて構成されるものなので、観測の場は明確に位置付けられます。

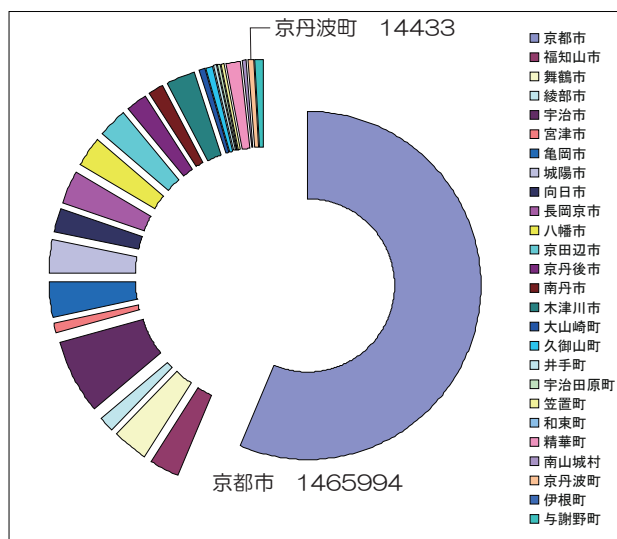
「農」の空間＝一般的に「農村」と呼ばれる特定の場所

「京都府京丹波町妙楽寺」

京都府のほぼ中央に位置するこの町は、平成の大合併の時にですら、近隣の市に編入する事を拒み、近しい3町で合併して「町」を守った町です。住民の殆どが農地を持ち兼業で農業に従事しています。多様な雇用が確保されておらず定住する若者は少ない状況が続いています。

図 2-3

京都府の市町村別人口



出所：京都府ホームページ

京都府の推計人口及び世帯数 平成 27 年 4 月 1 日

<http://www.pref.kyoto.jp/tokei/monthly/suikijinkou/suikeitop.html>

図 2-1 京都府の位置



図 2-2 京丹波町の位置



2-2 調査対象は「ここ」のすべて

見えるものはただただ美しい田舎風景ですが、その中から読み取れることは一つではありません。そして、「農」の空間では、生活の基盤に農業が存在しています。50年前は区民の全てが農業従事者でほぼ専業であったと思われ、農業を営むことと生活が一体化していて自給自足に近い暮らしが日常でした。現在では農業の歴史と共に進歩し、金銭を稼ぐために工場生産の様な収量拡大を図る農業が主体となっています。しかし、矛盾も多くみられ、収量拡大のために大型機械を導入することで、利益以上に支払いがかさみ、農業は赤字で当たり前と開き直って経営をする農家も多くみられます。そういった農家は金銭を得るために近隣の市町で就業し農機具代を支払い、兼業農家となっています。

では、なぜ赤字が続く農業を辞めずに兼業農家となってまで農業を続けているのでしょうか。そこには、先祖の絶え間ない努力の成果である田畑や山林があるからなのでしょう。何百年と引き継がれる固定資産である土地を守る事を義務と感じ、引き継いでいく事を生活の一部と信じて生きていく人々が生活しているからなのです。しかし、そういった人たちも高齢化を向かえ、徐々に引き継いでいく事への義務感も薄れ、生活意識も変化してきました。これからは次第に兼業農家すら減少する事でしょう。農業は生産の場ではなく趣味の場となるのです。

大規模農家が経営する「農業」は規模拡大を進め、生業として確立していく事でしょう。しかし、小規模農家で兼業率の多い都市近郊の中山間地での農業は生業としての農業が成立しません。自分の食べるものを生産し、生活に潤いや歓びを得るための楽しむ農業が主流を占めると予感します。



< 京丹波町の概要 >

《 気 候 》

この地域は、内陸性気候と日本海式気候の特徴を持ち合わせています。夏は、京都市などの盆地に比べ比較的涼しい高原の気象を現し、昼夜の寒暖の差が大きいのもこの地域の特徴です。冬は、冷え込みが厳しいという内陸性気候を示す反面、日本海式気候の影響を受け、季節風が吹き、しぐれやすく、降雪や積雪をもたらすこともあります。また、南側の平野部では、秋から冬にかけて霧が発生しやすいのも、この地域の特徴です。降水量は、年間を通じて比較的少ない傾向にあります。

《 位置・地勢 》

京丹波町は、京都府のほぼ中央部にあたる丹波高原の由良川水系上流部に位置し、東は南丹市に、西は福知山市に、北は綾部市に、南は南丹市および兵庫県篠山市に接しています。

丹波高原にあって、長老ヶ岳(917m)のほか標高400mから600mの山々に囲まれ、南側の山地は分水れいの一部を成しています。

面積303.07平方キロメートルの農山村で、このうち約83%を森林が占め、この間を縫って耕地が広がり、集落が点在しています。丹波地区では須知および蒲生を中心に商業店舗、住宅等がまとまった市街地が形成されており、瑞穂地区では橋爪、和田および大朴にかけて、

和知地区では本庄で、それぞれ小規模な市街地があります。古くから、都と丹後・山陰地方を結ぶ交通の要衝として栄え、現在も京都縦貫自動車道(京都丹波道路)やJR山陰本線をはじめ、国道9号、27号、173号などが交わり、京阪神など大都市圏へ1時間台で移動できるなど、比較的交通便利に恵まれた地域です。

《 歴史・沿革 》

この地域は、山陰街道沿いの交通の要衝として、また、山陰街道から若狭方面へ向かう街道筋として繁栄しました。特に須知地区は、宿場町を形成し、今でもその面影を伝える古い街並みが残されています。

明治22年の町村制施行時には、須知村、竹野村、高原村、檜山村、梅田村、三ノ宮村、質美村、上和知村および下和知村の9村がありました。これらの村は、地形・産業・経済の状況も大同小異で、人情や風俗もよく似ており、地理的な一体性から人の交流を中心に古くから親密な関係を保っていました。

明治34年に須知村が須知町となり、昭和26年には須知町が竹野村を編入、また、檜山村、梅田村、三ノ宮村および質美村が合併して瑞穂村が誕生しました。

昭和30年には、須知町と高原村が合併して丹波町が、上和知村と下和知村が合併して和知町が誕生しました。また、同年、瑞穂村は町制を施行し瑞穂町となりました。

丹波町・瑞穂町・和知町となって50年が経過した平成17年10月11日、3町が合併し、京丹波町が誕生しました。

出典：京丹波町ホームページ 町のすがた

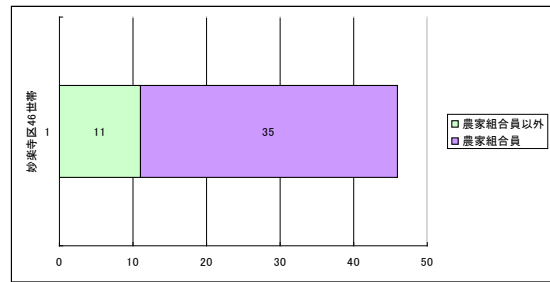
<http://www.town.kyotamba.kyoto.jp/category/4-0-0-0-0.html>

そして、「ここ」と位置付ける京丹波町妙楽寺区ではすでに職業としての農業離れが始まっています。世帯主である男性が亡くなると同時に、後継者の居ない農家は非農家となり土地を貸すことで土地を守るのです。しかし、20年前までお金をもらって貸していた農地が今ではお金を出して借りてもらうまでになっています。高齢者になって金銭的に苦しい世帯では農地を貸すことも出来ず耕作放棄地となって徐々に荒れ果てていくのです。

その根拠となるデータは図2-4、図2-5に見られるように京丹波町の人口の減少、高齢化人口の増大に伴う高齢化率の増加から読み取る事が出来ます。生活意識の変化から便利で就業機会の多い都市へ後継者が流出し、土地を守る意識の高い高齢者は医療の進歩と共に土地に留まり続けています。



図2-6 妙楽寺区農家組合世帯（平成26年）



妙楽寺区45世帯中、農家組合世帯は35世帯で約76%。非農家組合世帯は定年後に別荘感覚で暮らす世帯と商店経営や農地を持たない小作農家の後継者が農家を廃業したことが多い。

図2-4 京丹波町人口・世帯数の推移

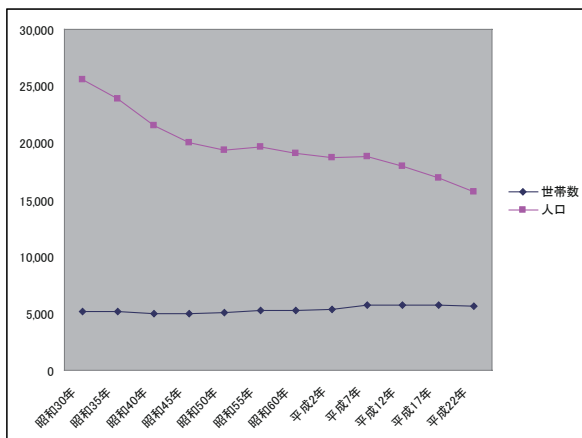
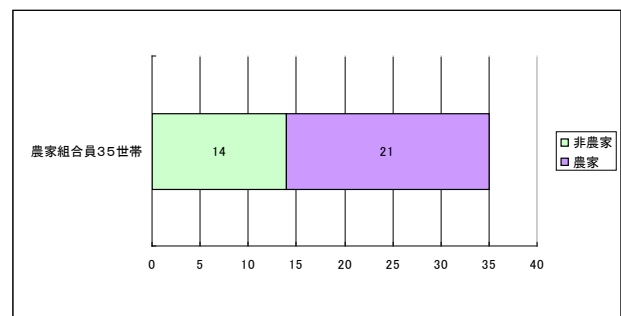


図2-7 妙楽寺農家組合構成（平成26年）



農家組合員は耕作していなくても農地を持っていると入らなければならない。世帯主が亡くなって後継者がいないまま土地を貸している非農家が40%いる。

図2-5 京丹波町年齢別人口の推移

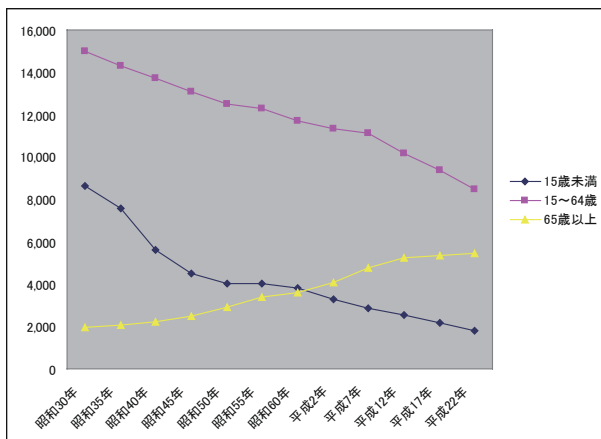
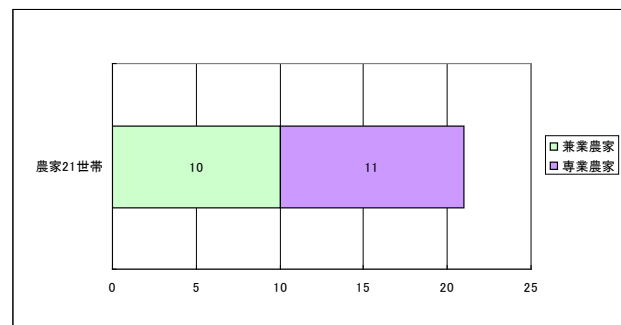


図2-8 妙楽寺農家の専業・兼業率（平成26年）



農業を営んでいる農家のうち専業はほぼ定年後の人である。

※図2-4.5 京丹波町ホームページより 国勢調査データ
<http://www.town.kyotamba.kyoto.jp/0000000003.html>

※図2-6.7.8 京丹波町妙楽寺農家組合より聞き取り

ただの田舎の風景には歪んだ現代社会の縮図ともいえる問題も潜んでいる事が理解できます。

それでは、100年後の「ここ」である京丹波町妙楽寺はどういった人が住み、どのような暮らしが営まれているのでしょうか？現在の「ここ」から未来の「ここ」を予測する。それも「ここ」から発する情報なのかもしれません。

妙楽寺区では、こういった何処の中山間地でも起こっている農業離れ・高齢化に対して、少しばかりの歯止め効果を期待して農業法人を立ち上げました。農地を耕作放棄地にしてしまわない為に、借り手の無い農地を5軒ほどの専業農家が請け負っていくものです。貸し手はもはや未来永劫農家に戻る事のない完全に後継者が居ない人たちです。図2-9、図2-10に見られるように、妙楽寺区では後、5年ほどで農業法人の耕作面積が個人耕作面積を上回る事が確定しています。

※農業法人は5妙楽寺居住の農家で構成されていて、個人としても農業を営んでおり、その耕作農地を合わせると農地面積の半分以上になると思われる。

ところが、この農業法人にも高齢化の波がひたひたと押し寄せてきているのです。妙楽寺農業法人の平均年齢は59.5歳、このまま法人を継続していくと5年後には60歳を超えてしまいます。妙楽寺の農地をほぼ守っている法人メンバーも20年後には全員、農業を営めなくなり後継者もいなくなります。「ここ」にある「農」の空間はあと20年で終焉を迎える事となります。

図2-9 妙楽寺区農地（平成26年）

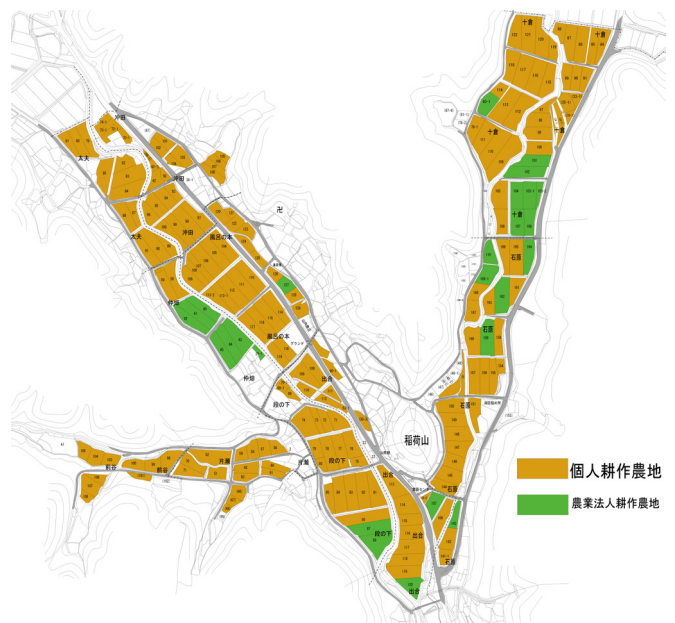
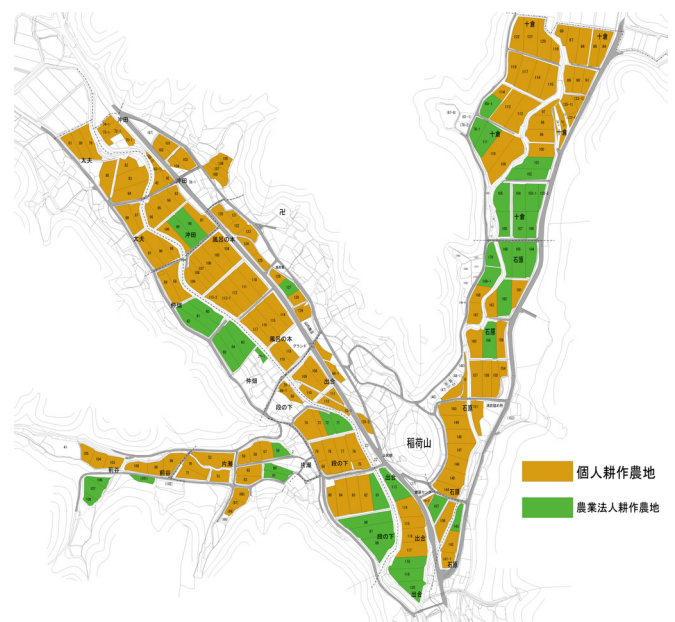


図2-10 妙楽寺区農地（平成30年予測）



※図2-9,10 京丹波町妙楽寺農家組合より聞き取り

第3章「ここ」から始まる～研究の展開

3-1 「鍵」を記録する～写真調査シート～カード

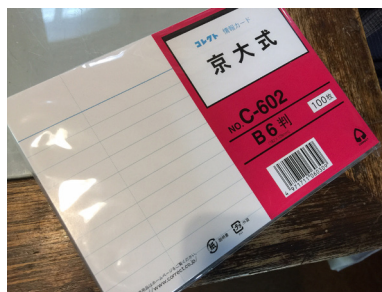
まずは「農」の空間から得られる様々な情報を記録しなければなりません。しかしながら、私の専門は美術です。論文を書く訓練はおろか、ちょっとしたレポートすら書く訓練や機会が無く半生を生きてしまいました。そこで、記録の仕方を「知的生産の技術」梅棹忠夫著に学ぶ事としました。国立民族学博物館の初代館長を勤められた梅棹氏の考案したカード方式で記録を保存していこうと決意したのです。梅棹氏のこの書籍は1969年に出版され約45年が経過していますが、創造的な知的生産についての実践的な方法は現代でも十分に対応できるものと考えます。

現代の情報は紙媒体ではなくデータが主流です。そして、情報は日に日に小型化され小さなメモリースティックやスマートフォンに詰め込まれています。また、情報は常にフォルダー化され引き出しにしまいこまれます。しかし、創造は常に広い敷物の上に多くの鍵を撒き散らし思考錯誤をくり返すものです。視覚的に創造を繰り広げる為にこのカード式記録法は有意義であると考えます。



参考：梅棹 忠夫 著
「知的生産の技術」岩波新書 1969 岩波書店

ところが、私は長い時間をカードにしたための事も無くメモを取る事さえせずに後戻りできない時間をぼんやりと過ごしてきました。記憶を頼りに情報を精査することはとても困難なことです。そこで、記憶に通ずる情報としてデジタルカメラを手に入れたときから現在の携帯電話に無差別に保存されている写真データを梅棹式カードの基点とすることとし、写真データの無いものはしかたなく文章やイラストで記録する方法を実践する事にしました。



美術やデザイン的な訓練は受けていても、印象良く確実な伝達が可能な文章を書く自信が持てないこともあって、カードに記述する前段階の写真添付の調査シートを作りました。20年ほど前から普及したデジタルカメラの進歩によって、田舎暮らしの私ですら約23000枚、32ギガの写真情報を蓄積していました。その写真一枚一枚を眺め、なぜこの写真を撮ろうと思ったのかを思い起こしながら調査シートを淡々と作り始めたのです。

そこには「農」に纏わる情報が季節と共に記録されていました。もちろん、家族の肖像が保存されていたり、いったいなぜこの写真を撮ったのか意味不明のものもあります。しかし、そのときに何かのきっかけで写真を撮ったことには間違いが無いのですから、自身の経験をかけがえの無い記録として見直す事としました。年を追って同じ風景に感動したり20年間でも1度しか経験できない情報も有り、ひょっとしたらこのちっぽけな情報が100年に一度、1000年に一度の情報に変わる事もあるのかもしれないことに気づく作業となりました。論文を書くことで否応無しに自分のもつ情報を見直すこととなり新たな気付きとなったのです。

< 調査シート > (例)

<p>■秘密の場所を知ってる気分。水晶があるよ。</p>				一言で言うならばと思いつくままの言葉を書く。
季節： 年中	鍵となる言葉： 自然	類似的事柄： 砥石山	通し番号： 036	季節：旬である季節。季節と関係ないものは年中と記載。 鍵となる言葉：分類 [農業][暮らし][素材][自然][決まり][教育] 類似的事柄：近いもの (有れば) 通し番号：順番は偶然
<p>写真資料：</p> 		<p>写真説明： 近くの山で水晶が取れる山があります。場所は秘密です。</p>		写真説明：写真を言葉で説明
<p>解説： 水晶そのものが落ちているときもありますし、岩に間に水晶が絡まっているものもあります。なんにせよ、自分にとっては宝ものが落ちているところです。</p>				解説：写真説明よりも少し詳しく文章化。その時に感じた事や思いとかも書き残す
<p>活用： 人に秘密にする事。秘密にしたいが、秘密を持つてゐることは語りたい。秘密の持つむずむずした感じを表すのはどうすればいいんだろう。</p>				活用：何かに利用できるかどうか？ 明確な利用方法を思いつかない場合も感じた事を書く

< カード > (例)

<table border="1"> <tr> <td>農業</td> <td>自然</td> <td>素材</td> <td>決まり</td> <td>暮らし</td> <td>生きる</td> <td style="background-color: #e67e22;">秘密</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	農業	自然	素材	決まり	暮らし	生きる	秘密			017	分類
農業	自然	素材	決まり	暮らし	生きる	秘密					
<p>水晶の取れる場所を知っている</p> 		通し番号									
		自分が思ったこと									
<p>誰にも言わない秘密の場所を知っていますか？</p>		活用する・汎用化する									
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">年中</div>	A-034	季節で分類									
		調査カード番号									

調査シート一覧（現在進行形）

- 001 雪うさぎは余りにもかわいい。
002 とぐろを巻く蛇には気をつけろ！飛び掛ってくるぞ！
003 草刈りで農村風景は保たれている
004 洞窟は意外と何処にでもある。
005 精米してるのか？糠を取っているのか？
006 胴割れする黒豆
007 家を作る喜びを共有する。
008 納豆を作る。
009 消防車が来るのに20分かかるまちでは消防団は意味のある団体。
010 山にはコルクがある
011 ピークハンター参上！
012 ふきのとうが春を知らせる
013 熊がいるぞ！
014 ついでに並べてみる（桜の花びら）
015 ついでに並べてみる（トイレットペーパー）
016 蕎麦の活用（スプラウト）
017 蕎麦の活用（蕎麦茶）
018 インディカ米は脱粒性が高い。
019 野生の麩にきれいなスマシ
020 生きているモグラ
021 筍だらけ
022 風呂焚きは子供の仕事
023 ハウスの中で勝手に宿根化
024 畦焼きは風物詩から条例項目へ。
025 土寄せは大事な愛情表現。
026 水生植物は水の中で発芽する。
027 朽ちる彫刻は風情を感じる
028 桜の名所は移り変わってく。
029 てんと虫騒しとはよくつけたもんだ。
030 鉄塔のある山に登ると地域を見渡す事ができる
031 ひなまつり大集合！
032 鹿もむずがゆい時があるのか？
033 大根の花を愛でる。
034 秘密の場所を知ってる気分。水晶があるよ。
035 ギンリョウソウに出会うと得した気分になる
036 海の底が岩に刻まれている。
037 まゆつばものがまかり通る場所。
038 タンポポの種は風に乘ってどこまでも。
039 蛭って幼虫も光るんか！
040 丁度美味しくなった時に食べましょう。
041 根瘤菌が窒素を集めてくれる。
042 葉をしようと手間暇かけて米糠ベレット製造機を作りました。
043 米糠除草は運次第
044 芭蕉は糸が取れなくても染めることが出来るかと見た！
045 キリギリスのメスは夕方、道路で夕涼みをする。
046 トマトのバリエーションに脱帽。
047 心細さを全身で表現する。
048 アヒルは夏、たんばく質をおたまじゃくしで取っている。
049 砥石は山で採れます
050 マムシはどこにでも隠れている。
051 古いものを見て自分の身体をいたわる事を思い出す。
052 無農薬米は高くても当たり前。
053 蛭の光に有り難さを感じる。
054 できるだけ、自分で食べるものは作ろうよ。
055 なんでも自分で何とかする癖をつける
056 笹ユリのような美しい花も自然の中では戦っている。
057 スッキー二の花は詰め物をする美味しい。
058 美味しいではなくて楽しい作物も作ることが大事。
059 白いスイカはほの甘いきゅうり。
060 100年経つと人の脳はタイムカプセルとなる。
- 061 1反を押すのに4時間かかります。それも、軽くやっています。
062 何も考えずやれば豊作。
063 ダイエットになりそうなそうめんかぼちゃパスタ。
064 ばくっとも許される時がある
065 食べ物を探すときは狸の後に歩け。
066 糠をコイン精米機で集める
067 瑞穂音頭は史実となる
068 黒豆の枝豆は一味違う
069 小麦にだって絵は描ける！
070 米の入ったパンはおにぎりの中にパンを入れたようなもの
071 はぎ掛けする人は少なくなっているが、はぎ掛けを見て嫌な気持ちになる人はいない。
072 晴れた日の水遊びで描く
073 大晦日のために8月から蕎麦を準備する～8月が種まき
074 美しさは1反以上の面積から始まる
075 ススキは立派な屋根材だ。
076 祭り好きはどの地区にも5人はいる。
077 豚の丸焼きを食べた事がある小学生
078 霧が晴れるような気分になる霧
079 巨人の周りを走り回る子どもがいる
080 あっという間の蕎麦の刈り取り
081 雪が降ると気温が3度下がる
082 野菜品評会はいつも満員御礼！
083 鹿柵で排除しているのか？守りに入っているのか？
084 しめ縄は年神様を迎えるものらしい
085 鶏の丸焼きより蒸し焼きの方がおいしい。
086 天候に左右される農業を楽しむ気持ち
087 瓢箪は50年は保存できる
088 亜麻は花も美しい
089 カラスに見張られて暮らしている
090 農業は戦いの連続
091 お昼寝を豆でなぞる
092 小学生は紙にまみれて勉強している
093 刈り草で絵を描くことは見る人は楽しいかもしれないが余りにしんどい
094 ひび割れは田んぼの表面処理表現
095 生育旺盛な瓢箪で何を作ろう？
096 ひまわりはいつもカメラ視線
097 カマキリに助けられる時もある
098 暴れ馬のような炎を手なずける
099 見つけてしまっでごめんなさい。
100 誰を喜ばしたくて手間隙をかけるのか？
101 寒い朝、霜が枯れ草の表面処理をする
102 おたまじゃくしのお腹はぐるぐるしている
103 そこにモリアオガエルが居るだけで・・・・・・・・・・
104 虹は自然からのプレゼント
105 稲藁で印をする
106 然素材の家は処理しなくても自発的に処理される
107 無農薬田お邪魔者・コナギは喉越しが悪い
108 スゲ科の植物は縄がなえる
109 毛皮が落ちているのが田舎の良いところ
110 葛は巨大造形物を毎年作っている
111 早取り小豆は野菜の一種
112 ど根性ポピーはラッキー人生
113 シロアリは家の土台を消化する
114 伏見唐辛子は3倍速で結実する
115 ボランティアさんに労働力を借りっぱなし
116 共同防除は朝霧のように集落をたなびく
117 煙突掃除の時、薪ストーブの稼働率を知る
118 行き倒れの獣の骨を拾う
119 種を食べるかぼちゃは特に必要ない
120 一夜にして豹変する事ができるのが雪景色

農業 自然 素材 決まり 暮らし 生きる

023

マムシは何処にでも隠れている



どこにでも危険が潜んでいることを忘れるな

夏

A-050

農業 自然 素材 決まり 暮らし 生きる

035

霧が晴れるような気分になる霧



比喩表現になる自然現象を体験する

秋

A-078

農業 自然 素材 決まり 暮らし 生きる 教育

026

100年経つと人の脳はタイムカプセルと化す



生き字引の話を聞こう

年中

A-060

農業 自然 素材 決まり 暮らし 生きる

054

自発的に処理される家



土に返ることを前提とした構造物を作る

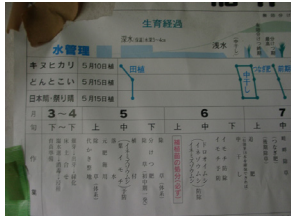
年中

A-106

農業 自然 素材 決まり 暮らし 生きる

028

教えられた通り作れば豊作



考えない事の危険性を知ろう

夏

A-062

農業 自然 素材 決まり 暮らし 生きる

056

スゲ科の植物は縄がなえる



0円の素材を活用しよう

夏

A-108

農業 自然 素材 決まり 暮らし 生きる

033

コスモスを美しいと感じる時



美しさは1反以上から始まる

秋

A-074

農業 自然 素材 決まり 暮らし 生きる

059

ど根性ポピーはラッキー人生



ラッキーは条件が整わないと成立しない

春

A-112

3-2 「鍵」から発する展開①

「no-card」を作ることで見えてきたことの一つに、既に私はカードのようなものを頭の中で切り混ぜて構想を練ってきた事が挙げられます。そこで、既存の企画案を例に挙げ、基となった「鍵」との関係を見て行きましょう。

●没企画

●越後妻有アートトリエンナーレ

大地の芸術祭2009

・人間は自然に内包される

越後妻有は、縄文期からの豪雪や河岸段丘といった厳しい条件のなかで、米づくりをしてきた土地です。人々は、切り離すことができない人間と自然の関わり方を探りながら、濃密な集落を営んできました。そこから「人間は自然に内包される」という基本理念が生まれ、すべてのプログラムに貫かれています。人間と自然がどう関わっていくか――。

その可能性を示すモデルになろうと、越後妻有の地域づくりは進められています。

▲基本コンセプト※1

「ボン吉煙に巻かれて旅日記」

・芸術祭のコンセプトに真っ向から向かい合って挑んだ企画。農業でいちばん機械化が進まず、年に4回は体を使って行わなければならない草刈りを少しでも楽しいものにするための装置。

鍵①→NO.21

「草刈りで農村風景は保たれている」

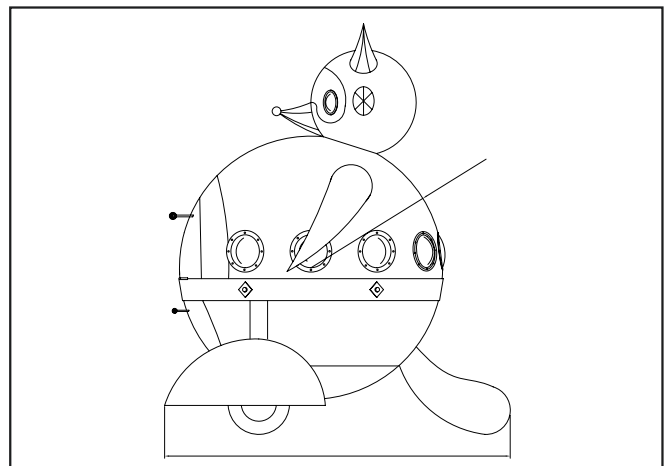
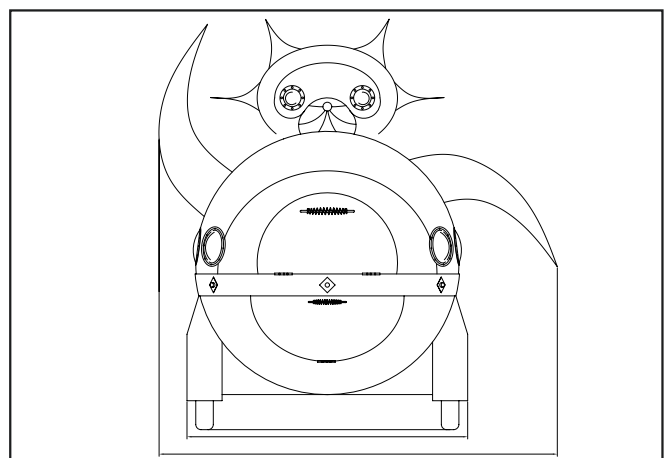
鍵②→NO.12

「畦焼きは風物詩から条例項目へ」

今思うと、この2枚のカードを利用して考えていたようです。結果的には没企画であったのですが、この企画を練り直して別企画が採用されました。

※1：引用 越後妻有 大地の芸術祭の里ホームページ

<http://www.echigo-tsumari.jp/index>



●入選企画

●水と土の芸術祭2012

水と土の芸術祭は、“私たちはどこから来て、どこへ行くのか～新潟の水と土から、過去と現在（いま）を見つめ、未来を考える～”を基本理念とし、2009年から開催しています。

水と土の芸術祭は、水と土によって形成された、独自の風土や文化に光をあてることで、人間と自然との関わりかたを見つめ直し、未来を展望していくヒントとなるものを探る芸術祭です。また、アートを媒介することで、先人たちが築きあげてきた水と土の文化を、国内外に発信し、次の時代を担う子どもたちに伝えていきます。

▲基本コンセプト※2

「気持ち観測衛星SORA1号」

・芸術祭のコンセプトは「水と土」「過去と今」と理解し、「水と土」にちなんで、太陽と雲の関係から物語を創作。人と人、人と自然など、関係の中で相手を思い図ることを強いることで理解を深めていく企画。

鍵①→NO. 40

「天候に左右されても気にしない」

鍵②→NO.25

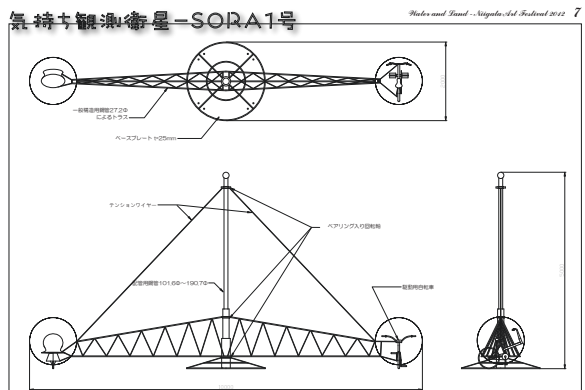
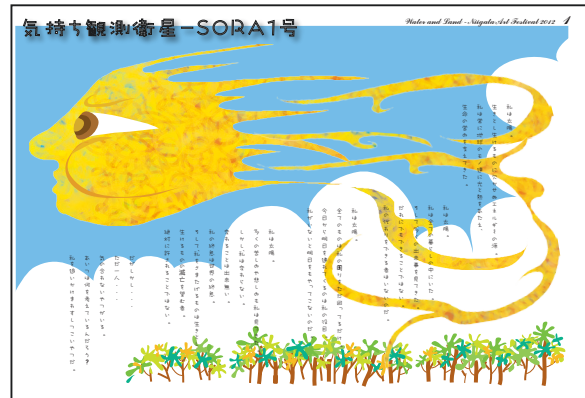
「笹ヨリも自然の中では戦っている」

鍵③→「共同購入の機械は次、使う人のことを考えるのが基本」（未カード化）

この3枚を使って企画されたプランで公募は入選し、形ある作品となりました。

※2：引用 水と土の芸術祭ホームページ

<http://2015.mizu-tsuchi.jp/>



△水と土の芸術祭 2012 大西治・大西雅子

「気持ち観測衛星SORA1号」

3-3 「鍵」から発する展開②

鍵は生活品のデザインや工夫、既存の流通システムに対する提案などにも利用することができます。

鍵→NO.41

「瓢箪は軽く50年は形状を保つ」

鍵→NO.46

「生育旺盛な瓢箪は沢山、収穫できる」

●瓢箪の活用

・瓢箪鞆

(瓢箪を切り、中の種を取り除く。蜻糸の鉤針でこまあみ、キャンバス生地で縫製)



・瓢箪物入れ

(リンゴ型瓢箪を2分し、内部の種を取り除く。内部に和紙を貼り、外部は水性塗料。接合部はファスナーを使用)



・瓢箪小物入れ・食器

(水性ニス+アクリル絵の具・漆)



・瓢箪小物入れ

(瓢箪の中には種が一つ貼り付けられている。使わなくなった入れ物は土に埋める事で、また瓢箪が出来上がる。植物のサイクルを生産・流通のサイクルに置き換える試み)



●草の活用

捨てるもの・邪魔なものからつくりだす…金銭を媒体とした巨大な流通システムから離脱し、「つくる」ことで「もの」と「個人」の完結した関係を築く。

鍵→NO. 56

「スゲ科の植物は縄がなえる」

・草から縄をつくる

家の前に生えていたスゲ科の植物で細い縄をないました。新聞を纏める位には十分に使える縄が出来ました。また、縄を使った工芸品は多種多様に作ることが出来ます。



鍵→NO. 48

「植物の過酷労働は紙になる事」

・草から紙を作る

捨てる予定だった花の咲いたほうれん草や小松菜の枯れ草から紙を作りました。紙は向き不向きはあるものの全ての植物で作ることが出来ます。自分で紙を作ることには不純物等が混ざったり、形や滑らかさが整わなかったりして難しいものです。しかし、紙を何かを書くものとして使用せず、違う素材として利用するならば、十分に活用できると思います。

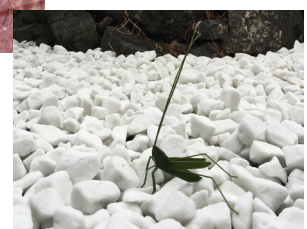
捨てる作物や邪魔な雑草などから何かを作ることは、個人の欲求を金銭を媒介としない「つくること」で満たす事ではないかと思います。



←捨てる状態の小松菜

・草から造形のヒントを得る

稲わらやススキの茎で蛸かごを作りました。作り方はとても簡単で、誰にでもできる遊びです。この遊びはただの遊びではなく素材や構造のヒントに繋がると考えられます。また、シュロの葉でバッタを作ることが出来ます。これも草遊びの一種ですが、季節感や風情を表すのには十分な表現であると考えられます。



3-3 「鍵」から発する展開③

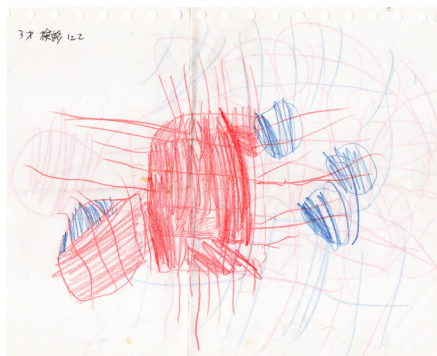
「鍵」の利用方法として、創作以外にも美術教育における基礎的能力向上の訓練として利用することも可能であると考えます。また、カード作成を個人が蓄積していくことで家庭や教育現場の中で成長しつつある若者を導く手引きのように利用することもできます。

①幼児教育として

・・・「生活」の中で「つくる」基礎を学ぶ

カードNO.・・・003、011、015、045、060

カードの中には生活を通じて「つくる」ことの喜びを得たり、目的を持った「つくる」事が互助精神を育むであろうと書かれています。幼児教育の現場は、原則として家庭だと思えます。我が家では家作りに始まり、「つくる」ことに囲まれて子供たちが成長してきました。まず「つくる」事が特別なことではなく、生活の中に存在することを「カード」から想起できれば、創造のファーストステップとして活用できます。



△3歳児の絵（長女：3歳児検診にて描画）

②小学校教育として

・・・「つくる」を感じる基礎を学ぶ

カードNO.・・・031、036、039、056

「つくる」ことが、楽しいことであることを学ぶために様々な体験を提案するカードが活用できます。小学校教育では担任教諭の資質が「図工」教材の選択や指導力に反映するので、教諭自身が興味を持った「つくる」事をカードにして、授業に利用していくことを提案します。「つくる」事が苦手な人が「つくる」ことを教えると、どうしても短絡的に「つくる」ことを提示したり、喜びを共有することができないからです。自分自身が興味のある「つくる」事を笑顔で生徒たちに伝えることでつくる楽しさを実感できる授業を実行することができるはずで



△長女：5年生のクロッキー



△次女：6年生の版画・ポスター

③中学校教育として

・・・義務教育で最低限の「つくる」基礎を学ぶ
カード NO.

・・・001、021、026、033、042、.48

中学生になると日本国民として義務であり権利である教育の最終段階に入ります。権利として認められている教育の一翼を担う美術教育ですが、年々時間数が減少しその結果、専任教諭も減少し非常勤講師が美術教育を担う現場が多くなっています。そこで、「つくる」技能の意味を問い直し、農村の生活の中にあつた「つくる」技能が社会と個人との繋がりを理解する機会を作ったり、時間をかけて作り上げていく課程を経験するプログラムをカードから提案することができます。それは、そのまま生きる技能へと継続できます。



△長女：中学1年生の切り絵

④高校教育として

・・・表現の多様性を知り構築する「つくる」を学ぶ
カード NO.

・・・004、006、013、029、046、053、54

高等学校は最早、美術教育の現場としてはかなり状況が悪化しています。高等学校の芸術単位は2。選択教科としての美術である学校が大多数を占めていると思われる。美術を開講している学校は多くとも、美術を選択し履修している生徒数は少ないであろうと思われます。音楽・書道・美術からの選択なので単純計算でも3割ほどしか履修していないことになります。また、高校では時間数が少なく現代までの美術史を学ぶ余裕も無くピンポイントでの理解・実践が余儀なくされています。そして、高校生の約3割の美術が好きで興味を持っている生徒に提供する美術教育は、多くの場合、現場の教師が独自の方法で授業を取り組んでいます。せっかく興味を持って美術を学ぶ機会を得た高校生に是非、発想のヒントの一端として農村生活があることを知ってほしいと思います。



△長女：高校2年生のインスタレーション作品



△長女：高校3年生のインスタレーション作品

⑤大学や生涯学習の場で

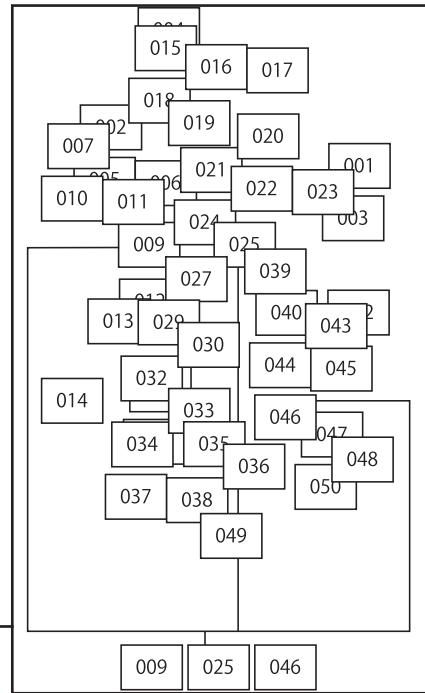
・・・発想の反復演習として利用することで、「つくる」の多様化を図り斬新さや独創的な創造を育む。



●鍵を無作為に選ぶことで、自分に対する創造の課題とする。


100マス計算が小学校の算数で有効な練習課題であるように、日々、創造を模索するものにとって頭脳を常に創作の場とするために練習問題として活用することも可能です。

方法：カードを無作為に2～3枚選び、その内容から考えだされたことから新たな創造を模索する。

●例（2枚のカードから連想）



<p>狸は巡回して食べ物を探す</p>  <p>029</p> <p>じっとしてても何も見つからない。動こう！</p>	<p>瓢箪は軽く 50 年は形状を保つ</p>  <p>041</p> <p>瓢箪を素材として活用しよう！</p>	<p>29→動き回る→日常の動線</p> <p>↑</p> <p>やはり瓢箪は昔のように水筒にすればよい</p> <p>↓</p> <p>41→入れ物として利用</p>
---	--	--

<p>小麦にだって絵は描ける</p>  <p>031</p> <p>どこにだって絵は描ける</p>	<p>生育旺盛な瓢箪は沢山、収穫できる</p>  <p>046</p> <p>唯一の形状で大量生産できるものとは？</p>	<p>31→どこにでも絵は描ける</p> <p>↑</p> <p>大量生産のものでも絵を描く事で唯一のものに変わる</p> <p>↓</p> <p>46→自然界は唯一だらけ</p>
--	--	--

<p>鹿柵は集落の周りに張り巡らされている</p>  <p>038</p> <p>内と外の関係を見直してみよう</p>	<p>インディカ米は脱粒性が高い</p>  <p>008</p> <p>掴もうとすると逃げていくものを考える</p>	<p>38→境界は見る側で変わる</p> <p>↑</p> <p>出入り自由なもの 窓や扉のない家</p> <p>↓</p> <p>8→つかまりにくいもの →自由になりたいから つかまりにくい</p>
--	--	--

3-3 「鍵」から発する展開④

●漫画表現で「鍵」を楽しい読みものとして作り直す。

鍵をできるだけ多くの人に活用してもらうために、「自分の理解できる1文に詰められた現象」だけでしかない鍵を漫画表現で、読み物として「農」から得られる「鍵」を伝える。

・例（カードの解説を漫画で表現）



・例（エッセイ漫画としてカード作成秘話を描く）



●「生きる」を知る

「no-card」を作っていて「農業」や「自然」等に分類する時、「生きる」という分類上の選択肢を増やしました。それは「農業」や「自然」「暮らし」などの中に「生きる」鍵も平行して含まれていると感じたからです。

現代社会では「生きる」ために金銭を稼ぎ、「生きる」ためのものを購入することが当たり前となっています。現代社会で生きる人にとって「生きる」は、ただただ腹を満たす為に食物を食べ、雨風を避けるために屋根の下に住み、寒さをしのぐ為に衣服を着るといった単純な事ではなく、複雑に絡んだ流通関係の中にあるように思えます。しかし、未曾有の事態を経験した今を生きる人たちにとって、これからの世界が常に平和で何も起こらないと言えなくなっている事は自明です。未曾有の事態にはお金は紙としてしか機能せず、電気等のエネルギーが断たれた時、どうやって生きていけるのでしょうか。本来の意味での生きていく事の鍵が「農」の空間には存在していました。

「生きる」と記されたカードは創造の鍵となるだけでなく、本来の「生きる」為の「鍵」となることとなるでしょう。「生きる」ために必要な知識はこれからどのような世界になったとしても普遍的な知識として活用されるはずで

調査シート（生きる）

- 2 とぐろを巻く蛇には気をつけろ！飛び掛ってくるぞ！
- 5 精米してるのか？糠を取っているのか？
- 7 家を作る喜びを共有する。
- 8 納豆を作る。
- 10 山にはコルクがある
- 13 熊がいるぞ！
- 16 蕎麦の活用（スプラウト）
- 17 蕎麦の活用（蕎麦茶）
- 18 インディカ米は脱粒性が高い。
- 21 筍だらけ
- 22 風呂焚きは子供の仕事
- 49 砥石は山で採れます
- 50 マムシはどこにでも隠れている。
- 54 できるだけ、自分で食べるものは作ろうよ。
- 57 ズッキーニの花は詰め物をするとうまい。
- 63 ダイエットになりそうなそうめんかぼちゃパスタ。
- 65 食べ物を探すときは狸の後を歩け。
- 73 大晦日のために8月から蕎麦を準備する～8月が種まき
- 75 ススキは立派な屋根材だ。
- 77 豚の丸焼きを食べた事がある小学生
- 83 鹿柵で排除しているのか？守りに入っているのか？
- 85 鶏の丸焼きより蒸し焼きの方がおいしい。
- 100 誰を喜ばしなくて手間隙をかけるのか？
- 107 無農薬田お邪魔者・コナギは喉越しが悪い
- 109 毛皮が落ちているのが田舎の良いところ
- 111 早取り小豆は野菜の一種



第4章「ここ」から「どこか」へ ～関係の再構築

4-1 「ここ」と「そこ」

私個人の経験の場である「農」の空間は「ここ」。そして、「ここ」はあらゆる誰かの「ここ」でもあります。日本の何処にでもある都市近郊の田舎はほぼ「ここ」と同じ状況であろうと思われ、似通った「鍵」に溢れかえっていることでしょう。

点でしかない個人の「ここ」。

あらゆる点の個人から見た「そこ」。

私が20年間かけて拾い集めた「鍵」は「そこ」と共通の「鍵」になる場合があります。また、「ここ」でしか発揮できない「鍵」でもあるのです。

私個人の「創造」の起点から、誰かの「創造」の起点になることで「鍵」は「ここ」から「そこ」へ移行していきます。

4-1-1

・「鍵」を介した交流・・・試行例

実際に私のつくった「農」の空間から得られる「鍵」を使って、様々な年齢・職種・価値観を持った人と交流を図りました。「鍵」は自分の創造のために使われるだけでなく、他者の意識を紐解く「鍵」であり切っ掛けであるともいえます。

<試行の方法>

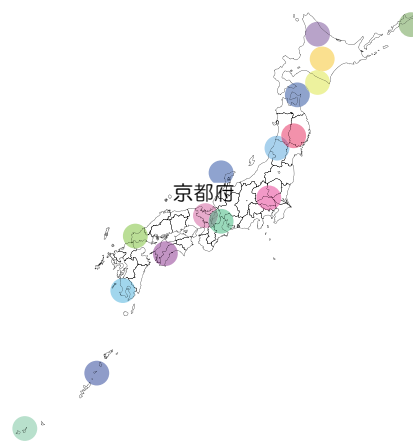
調査対象者と向かい合わせて座り、既存の「no-card」60枚をランダムに並べて気になったカード、好きなカード、面白いと思ったカード等の3枚を選んでもらう。カードの意味がわからない場合は補足として説明する。その3枚のカードを見て、何が気になったか、どこが好きかなどを話し合う。

今回の調査対象は、私の周りにいつもいる人達、言わば職場やご近所の友達達です。

図 4-1 ここから京都府へ



図 4-1 京都府から全国へ



- 例 1：高校生G（18歳・女性・京都府福知山市）
 19… 肩唾物がまかり通る場所がある
 45… 成長を形にしてみる
 54… 自発的に処理される家
- 例 2：高校生Y（17歳・女性・兵庫県丹波市）
 13… 朽ちる彫刻は新たな風情を醸す
 18… ギンリョウソウに出会うと得した気分になる
 60… 煙突掃除の時、薪ストーブの稼働率を知る
- 例 3：高校生R（17歳・女性・京都府舞鶴市）
 09… 感が狂ったモグラにしか出会えない
 35… 霧が晴れるような気分になる霧
 50… キジの卵を見つけてしまっておめんなさい
- 例 4：高校生K（17歳・女性・兵庫県丹波市）
 30… 黒豆は丹波地方の特産
 35… 霧が晴れるような気分になる霧
 51… 寒い朝、霜が枯れ草の表面所処理をする
- 例 5：高校生K（17歳・女性・京都府福知山市）
 09… 感が狂ったモグラにしか出会えない
 21… 楽をしようと手間隙かけて米糠ベレット製造機を作る
 30… 黒豆は丹波地方の特産
- 例 6 高校生Y（17歳・女性・京都府福知山市）
 09… 感が狂ったモグラにしか出会えない
 14… てんとう虫騙しとは良くつけたものだ
 37… 野菜品評会はいつも満員御礼！
- 例 7：高等学校養護教諭（40代・女性・京都府福知山市）
 14… てんとう虫騙しとは良くつけたものだ
 30… 黒豆は丹波地方の特産
 57… 田舎は毛皮が落ちている
- 例 8：高等学校用務員（60代・男性・京都府福知山市）
 03… 家を作る喜びを共有する
 33… コスモスを美しいと感じる時
 35… 霧が晴れるような気分になる霧
- 例 9：看護師（50代・女性・京都府京丹波町）
 25… 笹コリも自然の中では戦っている
 33… コスモスを美しいと感じる時
 47… 向日葵はいつもカメラ目線
- 例 10：数学教師（50代・女性・京都府福知山市）
 07… 玄蕎麦を炒って蕎麦茶を作る
 10… 原価0の放任された筍
 30… 黒豆は丹波地方の特産

- 例 11：陶芸家（50代・女性・京都府京丹波町）
 02… とぐろを巻く蛇には気をつけろ！飛びかかってくるぞ！
 35… 霧が晴れるような気分になる霧
 52… モリアオガエルは効果靚面
- 例 12：ピアノ教室（60代・女性・京都府京丹波町）
 01… 雪うさぎは余りにも可愛い
 34… ススキはしつこく生えてくる
 49… 暴れ馬のような炎を手なずける
- 例 13：陶芸家（50代・男性・京都府南丹市）
 03… 家を作る喜びを共有する
 09… 感が狂ったモグラにしか出会えない
 011… 火の扱いは子供の時から知っておく
- 例 14：大学講師（50代・女性・京都府南丹市）
 09… 感が狂ったモグラにしか出会えない
 38… 鹿柵は集落の周りに張り巡らされている
 50… キジの卵を見つけてしまっておめんなさい
- 例 15：大学講師（50代・女性・大阪府大阪市）
 16… 鹿は角がかゆい時があるのか？
 17… 水晶の取れる場所を知っている
 60… 煙突掃除の時、薪ストーブの稼働率を知る
- 例 16：美術教師（20代・女性・神奈川県出身）
 18… ギンリョウソウに出会うと得した気分になる
 35… 霧が晴れるような気分になる霧
 49… 暴れ馬のような炎を手なずける
- 例 17：体育教師（20代・男性・三重県出身）
 01：雪うさぎは余りにも可愛い
 34… ススキはしつこく生えてくる
 47… 向日葵はいつもカメラ目線
- 例 18：パート勤務（20代・女性・宮崎県出身）
 01… 雪うさぎは余りにも可愛い
 33… コスモスを美しいと感じる時
 59：ど根性ポピーはラッキー人生
- 例 19：英語講師（60代・男性・アメリカ出身）
 30… 黒豆は丹波地方の特産
 33… コスモスを美しいと感じる時
 35… 霧が晴れるような気分になる霧
- 例 20：彫刻家（50代・男性・京都府京丹波町）
 03… 家を作る喜びを共有する
 05… 消防車が来るのに20分かかかる街では、消防団は意味のある団体
 60… 煙突掃除の時、薪ストーブの稼働率を知る

※生きるのみで書かれているカードは無いので記していない

4-1-2

・「ここ」の鍵を発端とする

「ここ」で得られた鍵をカードの形だけでなく、目に見える形で提示していくことでどんな効果が期待できるかを想像してみます。

- 鍵カード…NO. 67 田んぼは余りにも個人的
- NO. 68 農は継続こそ美德

米を生産する工場的な農業としての圃場は、画一的な仕様で圃場も構成されています。たとえば、圃場の面積が巨大で1万ヘクタール（1町）。水平が保たれているので法面が無く、草刈りをする面積が少ない。圃場整備がされていて、地盤がしっかりしている。などが挙げられます。しかし、「ここ」での圃場は兼業農家であり中山間地農業で1枚の圃場が1反前後である圃場です。「ここ」では当然のように個人の生産に対する価値観によって圃場に差異が見られます。そこで、個の圃場に対する価値観を可視化することを提案してみます。

可視化することで圃場は美術作品発表のギャラリーと化し、個人の表現形式の一つとしての農業となり場となると考えられるからです。

では、「ここ」の圃場から何を発していけば良いのでしょうか？

私にとって、圃場の個性はたとえば無農薬であるとか、合鴨農法であるとか、直播栽培であるとかは特に重要性を感じることは無いと考えます。それは、美術における手法（油絵だとか日本画だとか）と同じもので、それ以上に大切なのはコンセプトでありその圃場を管理する人も人が伝えたいは何か？であると考えます。そこで、私の圃場で伝えたい事の一つに「継続していけるかどうか」が挙げられると思います。第2章で記述されているように日本の中山間地での農業は高齢化・後継者不足で「ここ」も同じような状況である事が明白です。

そこで、私はその継続していけるかどうかを主張する記号としての旗を立てることで、圃場の持つ個性＝私の主張を発表しようと考えたわけです。

・「鍵」を可視化する試行例

「限界旗計画」

収穫前2週間ほどの期間、黄色く色づいた田に旗を立てる。

旗は圃場1枚に1枚。

旗の種類は4種類

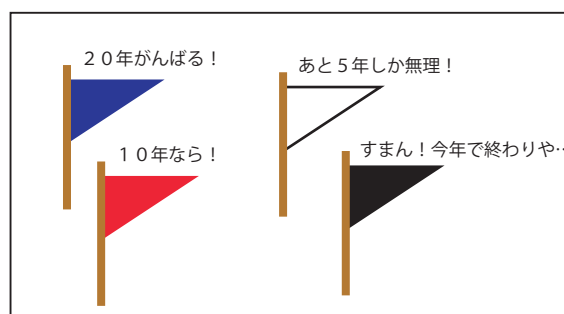
青…これから20年耕作を続けたい

赤…これから10年耕作を続けたい

白…これから5年だけ耕作を続けたい

黒…もう、今回は最後で耕作を辞めたい。

図4-1 旗のイメージ



「ここ」の原点である我が家の圃場8枚に、平成27年9月20日に、この限界旗を設置しました。周辺の圃場は秋の長雨に祟られ、刈り遅れ気味状態で久しぶりの晴れ間にコンバインがあちらこちらで稼動している姿が見えます。旗は木綿の三角形で旗をくくりつける棒には山裾に生えている笹を利用しました。

我が家の圃場は8枚で、1枚が約1反前後。全部で8.5反です。そのうち、青旗を掲げた20年後、私と夫が70代半ばまで続けたいと思える圃場は2枚。1枚は長方形で機械の出入りがしやすく圃場整備もされ地盤がしっかりしているところ。また、草刈りの量が少ない。もう一枚はここ8年間、無農薬で栽培を続けている圃場で農薬残留率が低いであろう圃場。この2枚は、自分達が食べる為、娘達に食べさせるために今後20年は作り続けるだろうと思える圃場です。

次に赤旗の10年作るであろう圃場は比較的作りやすい長方形で60代半ばの地域の農業を担う中核メンバーとして耕作し続けなければと言う使命感に駆られての選択です。次に白旗を掲げた4枚の圃場は、川沿いで形が悪く草刈りの量が長方形の圃場に比べて2倍はあるであろうという圃場です。そして、地盤も水が抜けやすい・抜けにくいと管理がしにくい圃場となっています。五年後の60代になったときの自分の健康状態を想像しての旗色の選択といえます。最後に黒旗ですが、幸い我が家では今年限りで辞めてしまう圃場はありません。後継者の居ない圃場でこの旗を掲げる時はその土地が何百年と続いた圃場としての役割を失い、自然に身を任せることとなるわけです。

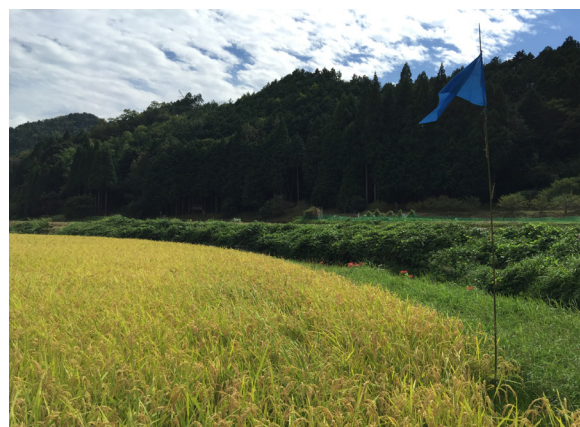
「鍵」から発展した可視化された主張。この行為がどのように理解され人に伝わっていくかは、今の段階では何ともいえません。たとえば、我が家が今、耕作してる圃場にこの旗を毎年掲げる事とします。徐々に旗の色や数が変わり、後、20年は続ける事が出来るでしょう。

今回、旗を設置することによって何らかの反応があったかはまだ分かりません。しかし、数年…数十年続けると必ず変化が訪れる予感がします。

京都府の中央に位置する名も知れぬ集落に立つ数枚の旗は、近くを走る国道から、最近開通した高速道路から、一望する事ができます。その道行く人は、その旗を見て「？」とってくれるのでしょうか。また、この旗の意味を知った近くの農民たちは、自分たちもその意思を表明する旗を掲げるのでしょうか。

個人のちっぽけな意思表示が少しずつ増加し、巨大な意思表示となることが出来ます。そこには、芸術の持つ個の傲慢で一方通行な意思表示とは違い、個の集積からできあがるうねりの様な意思表示であると予感します。そして、これは「ここ」から「どこか」へ数十年をかけて広がっていく最初の第一歩とも言えるのです。

図 4-2 大西家圃場未来予想図

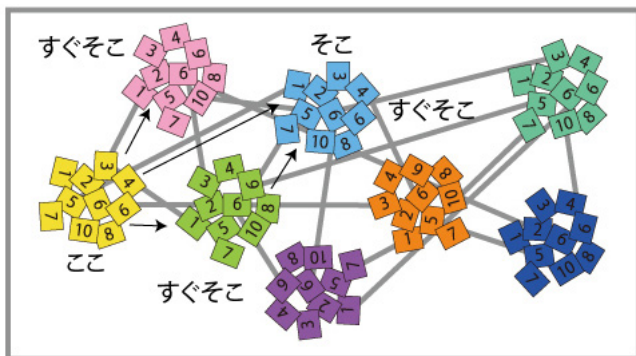


・「鍵」を共有化していくこと

「ここ」から得られた「鍵」がたとえば100あります。「そこ1」から得られた「鍵」が100、「そこ2」から得られた「鍵」が100あるとします。合計300の「鍵」を局部的に分類しないで、分類基準を変えて分類すると見えてくるものが、並列の300の「鍵」であるかもしれないし、「ここ」と「そこ」から共通する一つの「鍵」が見つかるかもしれないと思われます。同じ形式を持った「鍵」の集合は、プラットフォームの共有化（同一の条件の上にある状態）がなされている事であり、万人に共通する「鍵」を模索することにつながると考えられます。

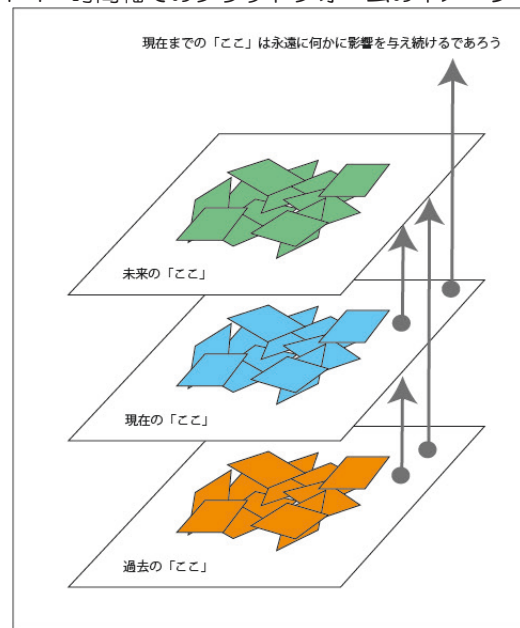
「ここ」と「そこ」を繋げることは情報通信が発達した現代では容易なことであると考えます。しかし、無限大にある「そこ」から無限大に「鍵」を収集することは、まるでツイッターのつぶやきの如く吐き捨てられる取りとめのない情報で溢れかえることになってしまうでしょう。あえて、情報の蓄積を紙ベースで保存し、手に取れ、全てを並列に机上に並べ俯瞰で情報を精査することを選んだこの研究では、「そこ」にある情報と共有化を図ることは非常に困難で、「そこ」の誰かを不快感なく巻き込んでいかなければなりません。プラットフォームの共有化は気心の知れた「すぐそこ」から始まり、「すぐそこ」からまた「すぐそこ」へと繋がり……「ここ」は「そこ」へと繋がっていきます。

図 4-3 プラットフォーム上の「鍵」イメージ



また、この「鍵」の共有化は、旬の野菜のように早急に食べなくてはトウが立って食べられなくなるものではありません。なぜならば、創造の発する場所は、多くの人にとって「経験」であり「経験の積み重ね」であるからです。個人の情報をじっくり時間をかけ、精査して次の時代に残したい……そんな情報が少しずつ繋がっていき、「ここ」は時間軸を持つ場となります。時間軸を持つプラットフォームは階層化され、個人の生き様を握る「鍵」が時代を超え引き継がれる事象として伝達されます。この階層化されたプラットフォームを築くことが、現在の「ここ」と過去の「ここ」、そして未来の「ここ」を繋げることと同義であると考えられます。その例として言えるのは、家族内で利用される「父母の教え」や規範として俗に言われる「先達の教え」のようなものではないかと思うのです。個人の創造の発端は決して自発的・突発的に発生するものではなく、場所や時間の軸の中で入組み混沌とした関係の中で積み重なった情報の一番上に発生するものではないかと推測します。

図 4-4 時間軸でのプラットフォームのイメージ



新聞社などが行う電話アンケートは、質問や選択肢が決められていて結果を決められた方向に導くように仕組みられている感じがします。しかし、「ここ」と「そこ」と「そこ∞」から発する敷き詰められた「鍵」から得られる創造は、視界や思考の中で様々な方向に関係性を持ち、バラエティに富んだ予測不可能な結果であることが予測されます。

4-2 「ここ」から「どこか」へ

現代の社会では情報は無差別に垂れ流され、熟考されず彷徨っています。そして、それが情報化社会の有るべき姿かのように思われています。これからの時代も情報は24時間垂れ流され続け、熟考されないつづきで世界中が埋め尽くされてしまいそうです。この巨大な情報を地球規模で解析し、方向を指し示す情報に分類する研究がきっとこれからも進んでいきます。情報を発信し続ける機器を人類全員が持つ時代がすぐそこまで来ているのです。それでは、この手に取る事のできる、人と人が直接対面し交流していく形式はどのように保管され、「そこ」と繋がり、「どこか」へと移ろっていくのでしょうか？

まず、「鍵」は常にオープンソースとして利用できるように保管庫を準備しなければなりません。保管庫は「ここ」に固定することなくどこの「ここ」にも対応できるように移築可能な小屋状の形態を提案します。保管小屋は日本古来の方法で構築され、釘等の金物を使わず木材や縄で組み上げられます。この形式も「カード54：自発的に処理される家」からの発想といえます。

全カードを配置できる壁を持ち、その都度並べ替えたりひらけてみたり、組み替えたりして、その全体を眺められる空間が小屋内に広がります。移築可能なことで、どこにでも設置することができ、オープンソースとしての重責を少しだけ果たすことに繋がるのではと考えています。

図 4-5 カード保管小屋イメージ



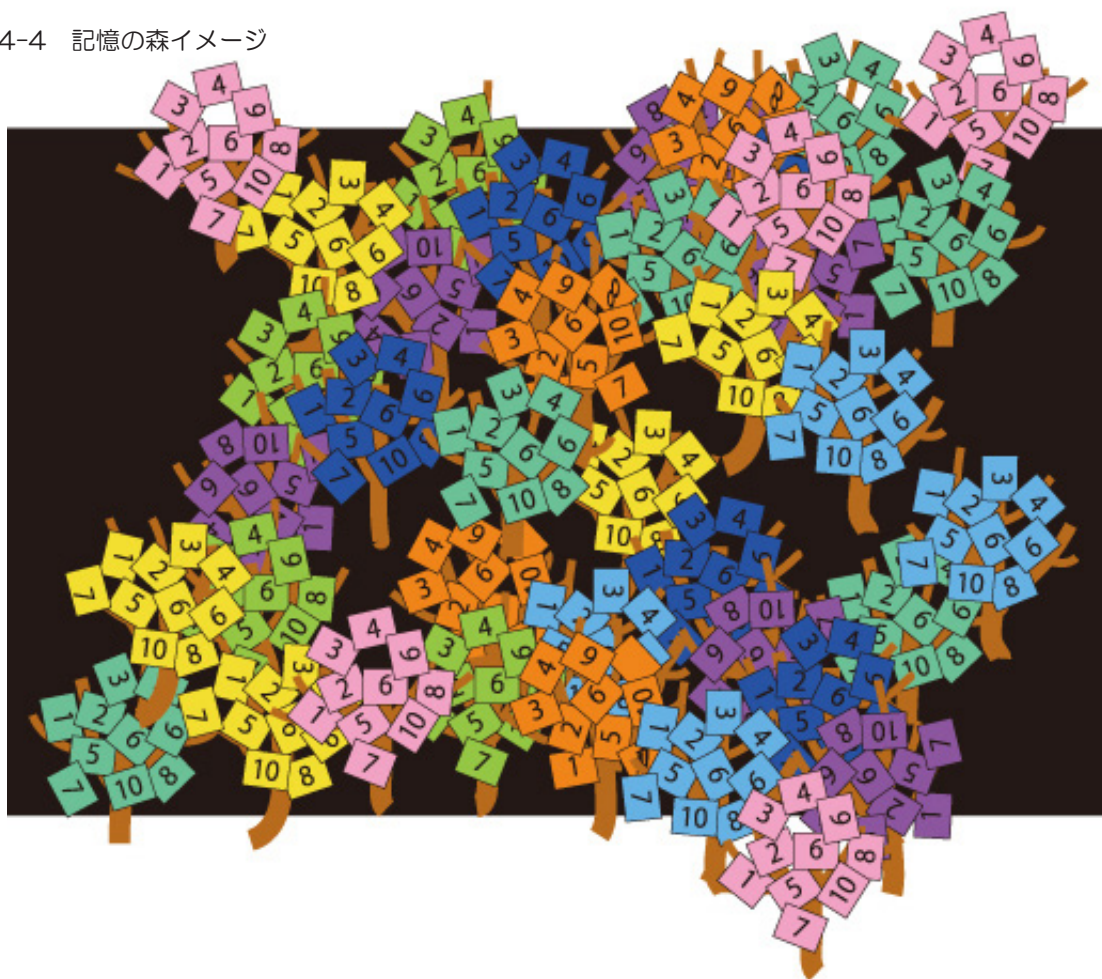
現代社会での情報は様々な情報機器によって管理され、特別でない普通の個人ですら大量の情報を知らないうちに蓄積し、発信して行くことが可能になっています。10年前、普通の専業主婦であった私の母が亡くなった時、残された情報は写真好きの父が撮った結婚後の写真と尋常小学校の頃の成績表、そして数枚の手作りの服だけでした。個人の情報は、大層な歴史上の人物でもない限り人の記憶と共に掻き消されていきます。母の死を経験して、個人の作り上げた情報が余りに形無いものであることがわかりました。しかし、母の思い出は私の記憶となり、私の母が生き抜いてきた証とも呼べる情報は私の情報として活用していくことができます。それは祖先から口頭で引き継がれていく教えの様なものとも言え、それが、25年の生活の中でカードとして選択する情報の決め手になっているように思います。

「鍵」の蓄積は完結するものではなく、また、一斉に始まるものではありません。賛同者を募ったり、強要するものでもないからです。「ここ」にある種が風に乗って偶然「そこ」に着地し芽ができれば、そこは「そこ」になります。

私たち「創造」をするものは思考することから「創造」を作り上げます。個の思考は単なる情報ではなく、情報を消化し記憶へと変化していくものです。この「ここ」から「そこ」の「鍵」は時間を経て情報の記憶へと進化を遂げます。

この記憶の集積は「伝説」や「言い伝え」や「先祖代々の家庭料理」のような情報として形のない「記憶の森」となることで、現代社会の情報の意味を問いなおすことになるのではないかと考えます。

図 4-4 記憶の森イメージ



最 後 に

この研究の発端である美術教師として高校生に美術を教える時、教育者として創造を見直すことになったというのは、詭弁であると今になって感じます。「半世紀以上を生き、様々な経験をした人間に良し悪しは無い」「生きている全ての人々が日々、新しい明日を作る創造者だ」と常日頃から思っていたから、この研究を始めたのだと思います。

そして、研究を進めていくに連れて、すでに他界した私の両親のことを思うことが多々ありました。母が入院して亡くなるまでの3週間で、結局何も聞けず仕舞いで、母の人生は私の知っている母のみになってしまったことや、父の最期の3年間、認知症を発症し彼の記憶がどこまで本当で、経験か創作か判らないほど混乱していて、それはもう創作以上の面白い呆けっぷりであったことが経験を記録に残さなければ、人の経験は消え去っていくのだと痛感していたからです。

また、私は田舎暮らしの中で、美術と縁遠い方々と話すことも多くありました。その人たちはしっかりと大地に足を踏ん張り、毎日毎日生きていました。この研究の一端として近くのおじいさんに聞き取り調査をしましたが、論文中に収めなかったのは、その人生が余りに過酷で悲しい話だったからです。人の人生を美術の論文の中で参照することは、その人生を冒瀆するような気がしました。この人の経験は私がカードに記載することは余りにおこがましく、無作法であると感じたのです。

情報の全てを残すのではなく、ひらめきや気付きの瞬間を見出せる情報の蓄積が大切であるとも思いました。悲しい経験や記憶は消し去る事も必要です。

自分の中にある両親の言葉は私を通じて私の娘にも語り継がれます。そんな、家族の言葉や経験が創造の起点であるという研究は特別なことではなく、学者や芸術家だけではなく誰にでもできる研究です。自分の経験を掛け替えの無いものとし、年を重ねることを潔く受け入れ、後継の者に繋げるのです。発想を自分だけのものとは思わず、これからの人のために使えるように保管することが齢を重ねた者の使命だとも思います。

「記憶の森」は今あなたの「ここ」から始まるのです。



参考文献

- ・ 京都府ホームページ
京都府の推計人口及び世帯数 平成 27 年 4 月…………… P 3
<http://www.pref.kyoto.jp/tokei/monthly/suikējinkou/suikeitop.html>
- ・ 京丹波町ホームページ
町のすがた…………… P 4
<http://www.town.kyotamba.kyoto.jp/category/4-0-0-0.html>
- ・ 京丹波町ホームページ
国税調査データ…………… P 5
<http://www.town.kyotamba.kyoto.jp/0000000003.html>
- ・ 京丹波町妙楽寺農家組合より聞き取り…………… P 5、6
- ・ 梅棹忠夫
「知的生産の技術」岩波新書 1969 岩波書店…………… P 7
- ・ 越後妻有 大地の芸術祭の里ホームページ…………… P 12
<http://www.echigo-tsumari.jp/index>
- ・ 水と土の芸術祭ホームページ…………… P 13
<http://2015.mizu-tsuchi.jp/>